
転生したけど引きこもります。

こ～ふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したけど引きこもります。

【Nコード】

N7095Y

【作者名】

こゝふ

【あらすじ】

死んで異世界に転生することになったミコト。ヴァンパイアになったのはいいけどまさかの引きこもり種族だった事実にうちのめされつつ、仲間と陽光が届かないダンジョンでモンスター退治に勤しんだり、遮光カーテンを閉めた暗い室内で裁縫したり。引きこもり街道まっしぐらにがんばります。（作者は初心者です、誤字脱字があると思いますので見つけたら教えてくださいと嬉しいです。また第一話の前書きは必ずお読みくださいますようお願い致します。）

ミコトの学習ノート 世界編(前書き)

読んでおくと楽かもしれない。

(追加事項があったら随時更新)

ミコトの学習ノート 世界編

【世界について】

半円球のドームのような形をしており、「世界の端」と呼ばれる壁で囲まれている。

大陸は2つ。

世界の東にフィルレイ大陸、西にノーム大陸。

2つの大陸は世界の端にそれぞれ接していて、大陸間の交易は皆無に近い。

理由は間にある海を渡ることが難しいから。

フィルレイ大陸には国が11個あってここ50年は小競り合いはあっても戦争はない。

フィルレイ大陸最大の国はルドンで大陸の3割を占めている。

【ルドンについて】

信仰は明星と黄昏の双神「フィラ」と「リュウレ」。

王都を囲むように6の領がある。

冒険者ギルドと神官ギルドの発祥国で小規模のダンジョンが多数存在している。

王制ではあるけれど世襲制ではなく、6領の領主から選ばれる。

【ギルドについて】

一般的に15歳から20歳の独り立ちした者はいずれかのギルドに登録しなければいけない。

20歳を超えて登録しないものやある一定の条件を満たしてしまつた者は、野党または特殊ギルド「奴隷ギルド」に登録される。

【冒険者ギルドについて】

登録資格は15歳以上。

支部数は二番目に多い。

税金は年20000セル。

ありとあらゆる依頼が集まりやすい、通称「何でも屋」。

設定可能職業は特になしだか必然的に武器職業となっている。

発祥地はルドン。

【魔術師ギルドについて】

登録資格は15歳以上で魔術が使えること。

支部数は最小。

税金は年50000セル。

個人依頼はほとんどなく、大半が国からの依頼。また、登録している者の8割が国定魔術師で各国の王宮勤めなのが特徴。

設定可能職業は魔術師のみ。

発祥地はルドンの北にある国サイロン。

【神官ギルドについて】

登録資格は15歳以上で医術（回復術）もしくは神術（予知や神託）が使えるもの。

支部数は三番目。

税金は年25000セル。

依頼は祭事関係や治癒関係のみ。信仰の関係上なのか上層部の内部衝突が多い。

設定可能職業は医術士、神術士。

発祥地はルドン。

【職人ギルドについて】

登録資格は15歳以上で各職業従事者の推薦を受けたもののみで、登録時に10000セル必要。

支部数は最大である街にある。

税金は最低10000セル以上で年収の2割と変動制。

依頼は専門的なものが多い。また店を構えるのにはギルドの許可が必要で無許可が判明するとギルドを追放される。

設定可能職業は鍛冶士（武器や装備品を作製）、調理士（料理や薬を作製）、建築士（建造物の作製）、会計士（販売店での販売買取）、製造士（武器・装備、料理・薬以外の加工品製造）、農作士（農家）、飼育士（酪農家）。

発祥地は不明。

【奴隷ギルドについて】

20歳を過ぎてもギルドに登録出来なかったもの、税金を納められなかったもの、ギルドを追放されたもの、罪を犯したものが登録させられる。

登録されたものは「隷属の首輪」を付けられ、労働力を求める者に買われるまで教育及び訓練を受け、労働を強いられる。

税金は年10000セルで奴隷所有者が払う、払えなかったら所有者もろとも奴隷ギルドに再登録される。

奴隷でなくなるには罰金及び奴隷でいた年数分の税金を払い他ギルドに登録資格を得たときのみ。

設定可能職業は奴隷。

発祥地は不明。

【職業取得について】

各ギルドで条件を満たして承認されると取得できる。

武器職業：所持している武器によって変わる。全系統武器のレベルが60を越えると武術士という職業になるらしい。

魔術師：生まれ持った才能により魔術を使うとなれる。

医術士：神殿に修行に入り医術を取得したらなれる。

神術士：生まれ持った才能で、予知か神託を受けれる人が神殿に修行に入り15歳を超えると貰える。

職人職業：各職業従事者に修行をつけてもらい、その人から推薦をもらう。

【土地・建物購入】

土地は領主もしくは地主に依頼。建物は建築士に依頼。建物付き土地の購入は領主もしくは地主に依頼のみ。

【奴隷の購入】

奴隷ギルドで各奴隷の能力価格と所属年数分の税金の2割を払うことで購入できる。

購入した奴隷は個人所属奴隷となり、所有者が死亡した場合奴隷も死亡する。

【ダンジョンについて】

入場にはギルドカードが必要、ただしパーティーの場合リーダーが持っていれば良い。

モンスターはいずれもフィールドに居るものより凶暴。

宝箱と呼ばれる物がまれに発見されるが出現条件は不明。

最終ボスを倒すとそのダンジョンは消える。

現在の確認ダンジョン数は268。

最大ダンジョンはルドンの西にある「銀樹のダンジョン」。

【モンスターについて】

世界に溜まる負の力が生み出したもの。

フィールドに居るモンスターの中には穏和（襲ってこない）なものもある。

倒すと世界に還りドロップ品を落とすことがある。

【ヴァンパイア族について】

世界の夜が産み出した希少種で精霊に近いとされているが、確認個体数があまりにも少ないため不明。

出生の法則も不明だが必ずある程度は成長した姿で生まれるとされている。

陽光下ではその身体能力の60%が発揮できないと言われており、直接陽光を浴びるとおよそ3分間で1割、日陰でも6分で1割の体力が削られる。

陽光の当たらないダンジョンや夜における身体能力は、おそらく全種族中トップと思われる。

暗視能力があるとおもわれる。

不老で長寿で寿命は1000年以上とおもわれるが、繁殖力はなのか極端に弱いため、ヴァンパイア族が子を成したという話は聞かない。

現在確認個体数8人。

【人間について】

世界でもっとも繁殖している種族。

身体能力は普通ながら繁殖力と適応能力が高い。

寿命は80年ほどで特定の発情期というものがない。
他種族との子をなすこともできる唯一の種族。

【エルフについて】

別名「賢き種族」。

魔術才能を有したものを多く排出している。

寿命は600年ぐらいで繁殖力は低い。

同族意識が高く集団で集落を構成することが多い。

【ドワーフについて】

器用さは全種族中トップと言われており、戦闘能力も高いものが多い。

寿命は500年ぐらいで繁殖力は普通。

個人主義で同族で集落を形成することはほとんど無い。

【ドラゴイドについて】

戦闘能力が高く物理攻撃能力は全種族中トップ。

寿命は800年ぐらいで繁殖力は低いが多産。

主従思考が強い種族で大抵のものが主を決めていると言われる。

自ら奴隷になるものが多い。

【ワーキャットについて】

敏捷性が高い種族。

寿命は80年ぐらい繁殖力は普通で多産。

【ワーウルフについて】

嗅覚や索敵力が高く戦闘力もなかなかにある種族。

寿命は80年ぐらいで繁殖力は普通で多産。

【ラビトニアンについて】

戦闘能力は低いが器用で穏和な種族。

寿命は60年ぐらいで繁殖力が高く多産だが乳児の死亡率が高い。

【精霊について】

生態および誕生についてほぼ不明。

世界が産み出したとも進化の果てともいわれている。

形状は様々でダンジョンの最終ボスとして存在するものもいるらしい。

【個人的メモ】

銅貨 : 1セル

青銅貨 : 10セル

銀貨 : 100セル

金貨 : 1000セル

白金貨 : 10000セル

ミコトの学習ノート 世界編（後書き）

ホントは8話でいれる予定だったけど、追記しやすいようにしてみましたw

第一話「アナタ ハ シボウ シマシタ」(前書き)

はじめまして、この度はお読みいただきありがとうございます。

当小説は蘇我捨恥様の「異世界迷宮で奴隷ハーレムを」に作者がインスピレーションを受け執筆したものです。

従っていくつか類似する設定が出てくる場合がございますことをご了承ください。

また、蘇我捨恥様より削除してほしいといわれた場合は掲載を取り止めることになっております。

以上のことを踏まえた上で稚拙な文章を読んでくださるという方のみご購入ください。

第一話【アナタ ハ シボウ シマシタ】

白い空間と言うしかない世界で、私は独りぼつんと呆けていた。

【アナタ ハ シボウ シマシタ ツギ ノ セカイ ヲ センタ
ク シテ クダサイ】

目の前に浮かぶ文字と数多の選択肢っぽい単語がここは夢なんだろうか？と思うが…。

【アナタ ハ シボウ シマシタ】

その言葉に思い出されるのはこの空間に来る前に感じた激しい痛み。最近頭痛が多かったのは肩こりとか目の疲れだと思っていたが、まさか病気だったんだろうか？

って！ なに素直に受け止めてるんだ私っ！

どう考えても夢だつての！

小説の読みすぎかなあ、死んで転生とかテンプレすぎるわ。

うん、夢だと思ったら気が楽になってきた。

【アナタ ハ シボウ シマシタ ツギ ノ セカイ ヲ センタ
ク シテ クダサイ】

うーん、改めて目の前の文字と選択項目見てみたけど夢だからかつつか夢なのに選択肢多くない？

人種、文化、魔法、科学、国数に戦争頻度あとは魔物？

これ全部選んでるうちに夢から覚めそう。

まあ、こういう設定考えるの大好物だから良いけどね！

まずは人種の項目は人族・亜人族・魔人族があ、全部欲しいから全部って2つまでかよっ！

うーん、じゃあさよなら魔人族……しくしく。

次は文化つと……あー文化の数があ、意味わかんないしっ！
あつ日本文化とかそう言う特色かな？1〜48の間か……あんまり多くても面倒だし12ぐらいでいいかあ。

魔法と科学は各0〜10で足して10以内にするのか……夢の中なのに細かい設定だな私っ。

魔法3で科学が1にしとか、科学0とか現代っ子は死ねるしね！
まあ、1がどんぐらいのレベルか知らないけど。

後は国数と戦争頻度か、国数は15〜20を選択して戦争頻度は10段階の3に設定つと。

魔物はダンジョンかフィールド……、あつ両方でも良いのか。

両方を選択して決定する。

【セカイ ノ セッテイ ヲ カクニン シマシタ ツギ ノ センタク ニ ススンデ クダサイ】

文字が変わってまた選択肢が出てくる、ゲームで言うところのキャラ作成のような感じかな。

種族選択、性別選択から始まり、年齢と容姿に体型かあ、ちょっとダルくなってきたかも…。

亜人族は選ぶ度にランダムでさらに種族が出てくるのか、まあエルフとかドワーフ、犬耳系とか猫耳系とかみたいな感じね。

…

…

…

…

…

…

…

……うー、決まらん。

ウサギ耳も良いし猫耳も良い！だがエルフも捨てがたい。ちなみに種族によってレア度が有るみたい。

人種が したら犬耳と猫耳やら良くあるよねーってのが 。
エルフとかドワーフが 。

龍族とか精霊っぽいのが

まあ、そんなものだよねーっと思いつながら選択し直し続ける。

...

h
?

いやキテるでしょっ！

モチロンこれに決定でしょ！

性別は女でいいとして容姿があ...

-
-
-
-
-
-

.....

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

.....

.....

.....

.....

.....

こんな感じ？

身長は150cmぐらいの小柄。

胸はまあ程よくCぐらい？

細身で顔はヴァンパイアのデフォなのかきつい顔が基本設定だった。まあ、いじりにいじって二重のパッチリ目、だけど全体的に儚い系。設定だからだろうけど無表情がコワイ。

まあ、なかなか満足のいく美少女に仕上がったからこれで決定つと。

【コジン ノ セッテイ ヲ カクニン シマシタ ノウリョク
ボーナス ヲ センタク シテクダサイ】

敢えて言おう、まだ続くのか！！

文字の下に現れたのはゲームのスキル画面みたいなもの。
ボーナスポイントは種族選択のように選ぶ度変わって1～99まで
あるみたい。

… 54、もうちょっと

… … 18 論外

… …

… …

… … 25 まだまだ

… …

… …

さっきから20～35あたりをいたりきたり。
さっきの54で妥協すべきだったかな？

-
-
-
-
-
-

.....

.....

.....

.....

.....

.....

正確には数字が光った。

【ボーナスポイント 99】

ふっ勝ったぜっ！
もちろん迷わず確定する。

ガッツポーズをとってふと気がつく、いつこの夢から覚めるんだろう？

第一話「アナタ ハ シボウ シマシタ」(後書き)

3話まで連続で投稿します。

第二話「とっろでこねって夢ですよね」(前書き)

いまだに異世界にたどり着いてない件…。

第二話「ところでこれって夢ですよね」

いい加減目が覚めてもいいんじゃない？つてぐらいには時間が経ってる気がする。

まさか本気で死後の世界？

いや、ないない。

ない、よねえ？

【ボーナスポイント ヲ フリワケテ クダサイ】

相変わらず無機質で読みづらい文字が浮かぶ。
ハイハイ、んつとまた項目多いなあ。

取得経験値二倍（3P）と成長率二割増加（3P）は必須だよね。

選ぶと取得経験値四倍（6P）と成長率四割増加（6P）の項目がある。

さらにそれぞれを選ぶと取得経験値八倍（12P）と成長率八割増加（12P）が出てきたので選んでみる。

それぞれの項目が白くなってそれ以上は出なかった。

これで42Pも使うのかあ。

あとは……ん？

なにこのボーナスポイント再振り（12P）って？

んーあれか、ネットゲとかにあるステータス再振りみたいな？
よし、迷わず選択。

これで54P使用、残りが45Pつと。

あと使えそうなのは…、鑑定（3P）

テレポート（3P）

第二ジョブ設定（3P）、第三ジョブ設定（6P）、第四ジョブ設定（12P）

残り18P。

うーん、ジョブ設定削ろう。

第四ジョブ設定（12P）無くして、残り30P。

ボーナス武器・槍1（3P）、ボーナス武器・槍2（6P）、ボーナス武器・槍3（12P）

ボーナス装備・指輪1（3P）、ボーナス装備・指輪2（6P）

これで使い切ったかあ。

よし、決定つと。

【セッテイ ヲ カクニン シマシタ】

その文字に満足する。

時間かけたし感慨深いなあ。

んで、どうなるんだろう？

「その設定で異世界行くに決まっておる」

.....は？

「この度は我が管理下の第107805世界を選んでくれて感謝する」

だれ、この人。

突然目の前に現れた人を凝視する。

「我は世界の管理人じゃ、おぬしを我が管理世界に導こう」

あー、テンプレの神様こないと思ったらここに来たのかあ。

「神ではなく管理人じゃがな」

...考えてることが読まれてるパターンですね、わかります。

「うむ、理解が早くて助かるの」

とりあえずお約束の状況説明を希望します。

「おぬしは死亡した。そして今行っておった世界選択に失格せずに我が管理世界を選択した、故に連れて行くのじゃ」

淘汰ってなんだ、不穏だなあ。

「世界選択において該当世界が空いていない、もしくは技能レベルが最大となった世界選択をした場合は元の世界の輪廻に戻るのじゃ」

空いていないって言う意味が分からないんだけど、あとなんで技能レベルが最大だとダメなの？

「空きは空きじゃ、異世界より呼び込まれるのは世界ごとに決まっておるからのう。」

技能レベルが最大の世界は飽和世界となって、基本的に滅びるからじゃ」

へえ…、ところでこれって夢ですよ。

「夢ではない」

………ねーよ。
ないない、妄想おつたよ。

「だから現実じゃ、おぬしの場合今から行く世界で死んだら魂がおそらく消滅する」

なんでさ！

「ヴァンパイアは不老長寿、繁殖力が酷く乏しいゆえに次代をなかなかつなげられぬのじゃ」

だから？

「お主の血縁がおらぬのでは魂は世界に耐えられずに消滅する」

……すみません、召喚じゃなくて転生なら両親とか親類いるんじゃないの？

「おらぬ、ヴァンパイアは世界が生み出すものとなっておる、したがって赤子の時期はなく先ほど作成した姿で転生となる」

さすがレア度 だねっ！

他にもヴァンパイアっているの？

「500人ほどの」

少なっ！ 世界の広さと人口知らないけどね。

「まあそれはいつてからの楽しみじゃ」

ふーん。

で、いつ夢から覚めるんだろう？

「だから現実じゃ、おぬしは死んでおる」

じゃあ死因はなんだ！

心臓発作か？脳梗塞か？！

「銃弾で頭を打ち抜かれて死んだのじゃ」

なんでさ！

「流れ弾と言うものじゃな」

最悪だっ！

死因最悪すぎるだろ！！

...

.....

.....

.....

.....

.....

.....はあ。

「諦めがついたかの」

とりあえず、死因聞いたら色々浮かんできましたから。
死ぬ直前の色々がっ。

「では行こうかの、おぬしの名を名乗るがよい」

「果雁^{かがり}みこと、ついでに享年36歳」

「うむ、享年は別に要らんのだが」

なんとなく言ってみました。

「まあよかろう」

うん、気にしたら負けってやつです。

「世界とおぬしを繋げたぞ、我から特別に行く世界の10歳ぐらいの幼子知ってる常識を与えよう」

まじかつ！

神様優しいね。

「神ではなく管理人じゃ」

オッケー、管理人様優しいねっ！

「では、行ってこい」

行ってきます。

第二話「とじろでいねって夢ですよね」(後書き)

あと一話投稿して今日の分は終わりです。

【閑話】 管理人から見た世界選択（前書き）

内容薄くてごめんなさい

【閑話】 管理人から見た世界選択

【界渡りが現れました 世界設定完了 該当世界候補の管理人は至急お集まりください】

脳内に響いた天啓にその場にいた管理人全員が顔をしかめる。

若い管理人が文句を言いながらも移動を開始する中、年配の管理人は動かない者が多い。

彼らは界渡りの枠が埋まっている世界の管理人なのだ。

界渡りが世界に降り立つ数は世界ごとに決まっている。

中には万を超える世界もあればたった一人という世界もある。

管理人に預けられる世界は大体一人千ほどといわれている。

「やれやれ、若い者は面倒ごとが嫌いな物が多いのう」

「そういうおぬしも面倒ごとはきらいであろう」

中堅と思われる管理人がのんきに界渡りを見守る。

「世界の設定で淘汰されぬのはともかくとして、亜人族のレア種【ヴァンパイア】が住まう世界か」

「これで世界は一気に絞り込まれたの」

「だが、よくもまあ【亜人族 ヴァンパイア種】を出せたものだ」

確立にして10万分の1のレア種だ。

もちろん最初の世界設定にもよるが…。

「ふむ、今の空き世界で該当するのは我とおぬしを含め12人で43世界か」

「意外と多いな」

ここからはボーナスポイントをいうもので選定される。
高ければ高いほど古い世界が選定される。

「我的世界は3つで34、35、76、78、96、99だな」

「ふむ、私は1つしかなくて51、53だな」

「早く終わって欲しいものじゃ」

「うむ」

普段であれば50台、70台で妥協するものが多い。

粘り強いものでも80台がほとんどだ。

稀に幸運に巡り合って90台前半のものも現れるが…。

しかし、今回の選定は彼らにとって試練とも言えるものになった。

…

……

……

……

……

……

……

……

いったいどれほどの時間が経っただろうか？

12人の管理人は疲労していた。

原因は只一つ。

界渡りがボーナスポイントを選びなおしているからだ。

「何回目だ？」

「もう数えたくもないわ」

若い管理人からそんなぼやきが漏れるのも仕方ないだろう。

「だあああついじゃん82！なんでやり直すんだよっ」

70P以上がでるとまさに阿鼻叫喚であつた。

もはや粘り強いとか言う問題ではなかった。

「無機質に淡々としておるの」

「うむ。種族といい、あれに当たった管理人は気苦労が多そうだ」

90台の管理人は3人。

一人を抜かし鬱々としていた。

「なんか楽しそうですわね、私達の可能性が高いのですよ？」

「いやなに、もし我が当たったらなにか褒美をやるうかと考えておつた」

「ちよっ！」

当人以外の全員が慌てる。

過度の干渉は違反行為だ。

「なに、ちと世界の常識を授ける程度じゃ」

「……まあ、ぎりぎりですわね」

ただでさえヴァンパイア種、しかも予想が通りなら90台はもはやチートだ。

管理人がさらに能力やアイテムを授けたら世界が狂う。

管理人は管理をするものであって、故意に干渉していい存在ではない。

「ん？」

「決まっただけだね」

界渡りの前には99の文字が輝いていた。

11人の管理人はほっとしてその場を去る。

「ほどほどにな」

「うむ」

残された管理人は11人を見送ると改めて息をつく。

「さて、彼女が降り立って世界はどうなるかのう」

【閑話】 管理人から見た世界選択（後書き）

あってもなくてもいい話だったかもしれない。

第三話【陽光下での身体能力60%減】（前書き）

やっと異世界に到着。しかし自分でかくのって大変ですね。。

槍の名前と効果を変更…。

ロムルスの槍は知名度が低かった（T・T）

第三話【陽光下での身体能力60%減】

引き寄せられるように目が覚める。
もちろん見えるのは知らない天井。

起き上がって体を確認してみるが、見事に作成したキャラクターだった。

ヴァンパイアについて考えると脳内に知識が浮かび上がる。

【ヴァンパイア族

世界の夜が産み出した希少種。

不老。暗視。怪力。魔力大。体力大。

人間との見分けが難しい。

【陽光下での身体能力60%減。】

…は？陽光下での身体能力60%減？
聞いてない。

あー、でも灰になるよりはましかなあ。

現在地と考えるとまたもや脳内に浮かび上がる。

【大陸名：フィルレイ

国名：ルドン

街：アームルト領 メロセフ

建物：篝火の宿 206】

親切だな。

10歳までの一般常識がどんなものかはわかんないけど、とらあえず生きて行くには困らない程度らしい。

大体15〜20歳で独り立ちかぁ。

私のステータスはどうかな？

【ミコトカガリ

ヴァンパイア族 15歳 女 レベル1

属性 闇、雷、水

槍術士 レベル1

魔術師 レベル1

なし

称号 なし

所属国 なし

所属ギルド なし

装備品 フラジールニップ、回復の指輪

所持金 107805セル

控え職業 なし

常時発動スキル：暗視、鑑定

任意発動スキル：テレポート、闇魔術レベル1、水魔術レベル1、雷魔術レベル1、槍技能レベル1】

ふむ。

常識では魔術師は少なくて才能が必要。

大体人間や獣人だと一万人に1人の割合、エルフとかドワーフだと1000人に1人か。

しかも第二・第三職業と言う認識はなく、武器職業以外は各ギルドでの承認で職業が変わると。

んで職業が変わるとその職業固有のスキルが使えなくなるのか。

ギルドは冒険者ギルド、魔術師ギルド、職人ギルド、神官ギルドか。

あー、テレポートって魔術師固有かあ。

魔術師ギルドじゃなくて冒険者ギルドに登録したいし、あんまり人前で使わないでいようっと。

さて、この槍と指輪の性能はっと…。

【武器鑑定

槍レベル

フラジールニップ

所有者 ミコト「カガリ

ダメージ+350%、致命打率+15%、集中力+35%、状態自動回復

「爆ぜよ、そして再生せよ!」】

【装備品鑑定

指輪レベル

回復の指輪

状態異常耐性60%、体力常時回復6%、魔力常時回復6%】

あはは……、チート武器だよこれ。

しかも所有者が刻まれてるから私以外は持てないとか、なんて都合主義っ。

普段はペンダントサイズのようになっていて、使うときに大きくな

るらしい。

さて、状況確認もしたしどうしようかな。

所持金は管理人様がくれたみたいだけど、潤沢すぎるんじゃないだろうか？

年収が一般人で大体50000セル。

それなりの冒険者で大体80000セル。

107805セルは15歳の小娘の持つ金額じゃないだろう…。

大金持つてるの怖いなあ。

盗難的な意味でっ！。

この世界に銀行ってないし…。

ギルドに早く登録してカードもらうかあ。

ギルドカードはお財布もかねてあって、所有者が刻まれるから本人以外は使えない。

まあ、無くしたら見つからない限りその中のお金は無くなるんだけどねっ！

カード自体は再発行可能。

あと冒険者の必須小物、アイテムボックスも買わないと…。

アイテムボックスっていつでも形は様々で一般的なバッグや指輪はモチロン、腕輪やネックレスタイプもある。

うん、そうと決まれば早速冒険者ギルドに行きますか。

第三話【陽光下での身体能力60%減】（後書き）

今日の分はこれにて終了。

第四話「現在すでに死にそうです」（前書き）

もう死亡フラグな件（、、）

第四話「現在すでに死にそうです」

一時間前の自分に言いたい。

なぜ陽光下で身体能力が60%減なのを忘れていたんだ。

現在すでに死にそうです。

なるべく日陰を選んでいるが、正直キツイ。

宿屋で聞いた冒険者ギルドまで後少しとは言え、マジ死にそう。

これ、常識知識にはないけど実際体力削られてるっばい…。

回復の指輪がなかったら今頃瀕死かもしれない。

なぜ昼に行動しようと思ったんだ私！

…

…

…

…

そんなこんなで割と危機的な感じで冒険者ギルドに到着。

途中で購入した日傘がなかったら死んでたかもね！

100セルもしたけど良い買い物だったわ。

だいぶ重いけど…。

「すみません、ギルド登録をお願いします。」

空いてるカウンターで事務員さんに伝えるとすごく驚いた顔をされた。

「なんですか！」

「お嬢さんが？えつと遊びかなにかかな？」

「いえ、本気です」

「……………」

「……………」

沈黙されたので沈黙してみる。

「失礼ですが年齢はいくつですか？」

「15歳です」

「……………はあ、まあいいでしょう。こちらについてきてください」

多少戸惑われつつもギルド登録の部屋に案内される。

「これよりギルド登録を行います」

「はい」

青白く光る魔法陣の中央に立つ。

ギルドカードに個人の情報を書き込む作業だ。

ちなみに15歳以下はこの魔法陣が発動しないらしい。

「心を静めてください。少し頭痛を感じるかもしれませんが、すぐに治まるので大丈夫です」

言われて青白く光る魔法陣を見つめると、光が強くなり身体を突き

抜けていく。

頭痛と言うよりも浮遊感を感じながらしばらく動かずにいると光が元に戻る。

「登録完了です、こちらがアナタのカードです」

確認すると名前、種族、性別、年齢、レベル、所属ギルド、職業（第一職業のみ）、所持金が記載されている。
種族があるのは頂けないなあ。

「所持金などは他人に見せたくないんですけど」

「でしたらこちらの台にカードを乗せて、所持金と種族しか隠せませんが隠すよう念じてください」

言われて隠れるように念じる。

「完了です」

あっさり終わった。

なんだか拍子抜けのような気もするが、こんなものと常識知識が告げている。

「他にご用はございますか？」

「所持金をカードに移すのと、アイテムボックスを購入したいのですが」

「わかりました、受付で行いますのでこちらにどうぞ」

事務員さんが事務的です。

最初の驚きはどこにいったんだろう？

受付カウンターに戻ると早速持ってきたバッグからセルを取り出す。
107705セル（白金貨10枚、金貨7枚、銀貨7枚、銅貨5枚）
を見て一瞬固まった事務員さんであったが、何事もなかったかのように取り出した箱にセルを入れてカードを上に乗せる。

「……………はい、完了です。あと、あんな大金をあまり貨幣で持ち歩かないでください。」

「はい」

ちよつとした忠告付きでカードを返される。

ちなみに箱に入れたセルは消えるらしい。

仕組みはよくわからない。

「……………ではアイテムボックスですが、形状はどうなさいますか？」

「腕輪をお願いします」

「わかりました、見本をご用意しますのでしばらくお待ちください」

立ち上がりうとして事務員さんが気がついたように私をみる。

「時間が少しかかりますので、よろしければあちらの依頼掲示板をご覧ください。では如何ですか？」

「そうですね、そうします」

言われて掲示板の方を見ると、如何にも冒険者って感じの人がいっぱいいた。

依頼ランクの掲示板を見ると探し物だの、たいていが雑用だった。

まあ、冒険者ギルドってある意味何でも屋だしね。
ちなみに職人ギルドがある意味職業やお店の斡旋所って感じ。

ぼーっと見てるといつの間にか事務員さんが後ろにいてビビった。
この人、実は実力者だったりして。

【個人鑑定

ナパーク 43歳 男 レベル73

職業 剣術士レベル64

所属ギルド 冒険者ギルド

称号 冒険者ギルドメロセフ支部長】

うええうつ支部長がなんで受付事務員してんのさあつ！

驚愕に目を開いたままでいても事務員さん…。

基、ナパークさんは気にしないでいるのか普通にカウンターに案内して腕輪を見せてくれた。

「こちらがミコト様の所持金で買えるアイテムボックスの腕輪形状です」

あー、この人は所持金知ってるから絶対買えない物は持ってこなかったのか。

しかし、色々あるんだなあ。

鑑定スキルを使ってよさそうなのを選ぶ。

【装備品鑑定

アイテムボックス 腕輪

素材 金 オブシディアン

容量 6500】

価格 30000セル

【装備品鑑定

アイテムボックス

腕輪

素材 金 サファイア

容量 6800】

価格 32000セル

【装飾品鑑定

アイテムボックス

腕輪

素材 白金 オブシディアン

容量 8500】

価格 52000セル

【装備品鑑定

アイテムボックス

腕輪

素材 白金 エメラルド

容量 9000】

価格 55000セル

高いのか安いのか微妙です！

いや、普通にアイテムボックス自体が高いんだけどね！！
値段に悩んでいるとナパークさんがアドバイスをくれる。

「白金で出来たものは一生物としてお使い頂けますよ」

「やっぱりそうですよね…」

「私のオススメはこちらのオブシディアンのほうです」

おや、てっきり高いほうかと思ったけど違うみたい。

「重量の問題なのですが、エメラルドは重いものを収納するのにはむいていません」

「そうなんですか」

「その点、オブシディアンを使ったものは重量制限がありません」
「へえ」

そんな優れもののになんでエメラルドのより安いんだろう？

「とはいっても、一般的なドロップ品を収納するにはそこまで重量に気を遣いませんけれども」

「あ、そっか…」

ドロップ品で単品の重量がものすつごくあるものを落とすモンスターなんてそうそう居ない。

居ても超上級者でなければ狩れないだろう。

「それから…ミコト様はおそらく闇属性でしょうからオブシディアンとの相性がいいと思いますよ」

「え…」

「申し訳ありません、カード作成の時に種族が見えてしまいましたもので」

「あー、いえ…できれば他言無用でお願いします」

「もちろんでございます」

そっかー、そりゃそうだね。

しっかし…うん、何だろー弱みを握られた気分。

「じゃあ、オススメのこれにします」

白金とオブシディアンで出来た腕輪を指差す。

「かしこまりました、所有者を刻みますので少々お待ち下さい」

ナパークさんが他の商品を下げて選んだ腕輪を取り出した台の上に置く。

ギルドカードも置いたので精算も一気にするらしい。

台がほんのり光って所有者を刻み終えたらしい。

本当にこういったことの仕掛けはどうなってるんだろう？

常識知識では「そういうもの」となっている。

オーバーテクノロジー？

第四話「現在すでに死にそうです」（後書き）

補足的なナパーク視点と管理人様視点も近日公開予定です。

【閑話】ナパーク、出会う。（前書き）

ナパークは主人公にとって重要な人になる……予定なんです。

【閑話】ナパーク、出会う。

冒険者ギルドメロセフ支部長のナパークの趣味は、受付に座ってギルドを訪れる若者を見守ることである。

若い頃は国から勧誘がかかるほどに活躍していたが、モンスターの攻撃で利き腕に怪我を負ったのを機にあっさりと冒険者ギルドの事務員になった変わり者だった。

そして今、彼の前で未来広き若者が魔法陣の中央に立っている。魔法陣は無事に発動して彼女の目の前にカードが浮かび上がった。ナパークが確認のためカードを見て思わずかたまってしまった。

【種族 ヴァンパイア】

現在確認されている個体数最小のヴァンパイア族。それが今まさにナパークの目の前にいるのだ。

少女、ミコトにカードを差し出すと眉をひそめられた。

「所持金などは人に見せたくないんですけど」

（ヴァンパイア族なんておおっぴらにしたら、どこぞの愛好家やらに目を付けられますしね）

「でしたらこちらの台にカードを乗せて、所持金と種族しか隠せませんが隠すよう念じてください」

所持金はもちろん、種族も差別が発生して問題になる場合があるため秘匿できる。

ナパークは目の前のミコトが心配でしかたがなくなってきた。日傘を差していたとはいえ、こんな陽気の良い日に出歩いていることから、もしかしたらあまり自身の種族を知らないのかもしれないと予想したためだ。

（確か旅の途中で会ったヴァンパイア族の男も自身の種族をあまり知らなかったな、ヴァンパイア族とはそういうものなのだろうか？）

ミコトが所持金の移動とアイテムボックスの購入を希望したので、ナパークは内心ほっとした。

（購入作業が終わるころにはきっと陽も傾いているに違いない）

そして受付で持っていた袋からおもむろに取り出された金額にナパークは頭を抱えなくなった。

（こんな少女にこんな大金を持ち歩かせたのは誰だ！）

所持金を移動する間、ミコトを15歳まで育てたであろう知りもしない人物に怒りがこみ上げてくる。

「はい、完了です。あと、あんな大金をあまり貨幣で持ち歩かないでください」

「はい」

ミコトの表情から自覚はあったようだと判断すると、ナパークは次の用件に移る。

腕輪形状のアイテムボックスを要求されたので席を立ち上がりかけてふと動きを止める。

（いつそずっと使える物をだしてみますか、資金はあるようですし…）

そうなれば取ってくるのに時間が掛かる。

その間ミコトが退屈するだろうと依頼掲示板を勧めた。

（一生物なら白金ですが金の物でもなかなか使えますよね）

白金物を5種類と金物を6種類、あとは銀と銅、鉄の物をそれぞれ10種類選ぶ。

（ヴァンパイア族は闇属性が多いと聞きますからオブシディアンの方がいいですね）

とはいえ、趣味もあるだろうと他の宝玉を使ったもの物選んでいた。

ちなみにナパークの愛用しているアイテムボックスも白金とオブシディアンのも物だった。

もちろんデザインはかなり違う。

ナパークのはそれこそ防具にもなりそうなゴツい物だが、ミコトに選んでいるのは華奢なデザインのものだ。

選び終えて受付に戻るとミコトはまだ掲示板を見ていた。

驚かせないようにとそつと近付いてみたが逆に驚かれてナパーク自身も少し驚いたなど些細なこともあったが、何事も無かったように受付で腕輪を選び始めた。

そして、ナパークは失礼だと思いつつもミコトが腕輪を選んでいる間、紙にヴァンパイア族の特徴と注意事項を書いていく。

ナパークの中でミコトの保護者は使えないダメなヤツとなっていた。

（こんなものですかね？）

書き終えてミコトを見るとまだ悩んでいるらしいので、よかれと思いいくつかアドバイスをする。

結果、アドバイスに微妙な顔をされてしまい些か出しゃばりすぎたかとも反省するはめになった。

【閑話】ナパーク、出会う。（後書き）

ナパークは世話焼きさんなんです。

第五話「だが断るっ」(前書き)

話がなかなかすすまないです(´・ω・｀)

第五話「だが断るっ」

用事も終わり、さあ帰ろうと言うところにナパークさんがまったを掛けてきた。

「まだ陽が傾くには時間がかかりますよ」

しまった！

陽光下でのあの危機的状況を忘れてた！

とは言え、掲示板も見たしすることもないし…。

あーでもない、こーでもないと思っていたら、またもやナパークさんが紙を差し出してきた。

「えっと？」

「失礼かとは思いますが、ミコト様の保護者の方はアナタの種族について詳しくないようですので、わたくしの知る限りの事を書き出してみました」

親切だ！

なにこの人親切すぎるっ！

「ありがとうございます、助かります」

素直に受け取って礼を述べるとナパークさんが言いにくそうにしていたので首を傾げてみる。

「えっと？」

「いえ、アナタを保護していた方はどういう方なのかとおもって…」

保護者……、管理人様は保護者じゃないし。

「そのような人は居ませんけど……」

「は？」

あれ、なんかすごく驚かれてる？

「居ない、というところ……つい最近独り立ちされたから今はいないという意味でしょうか？」

「えっと、そもそも居ません」

「……………は？」

あれ……、なんかやばい？

なんか変なこと言った？

「アナタを15歳まで育てた人が居るはずですが……」

え？ヴァンパイア族って生まれたときからそれなりに成長してるんだよね？

「居ないです」

「まさかっ……」

やばい、どうしよう……。

ナパークさんが絶句したまま動かなくなってしまった。

「……………っ！ ミコト様」

「はっはい！」

「本日このあとのご予定はございますか？」

一分間ぐらい固まっていたと思ったら、なんだか苦虫でも嚙んだみたいな表情で聞かれた。
もちろん予定なんか無い。

「ない、です」

親切にされたので素直に答えてみる。

「それはよかった、では上でお話しましょうか」
「うえ？」

なにがよかったんですか？！

そしてお話は決定事項ですかあああつ！

展開が早すぎてついて行けてないですけどー！！

…

…

…

…

そして私は今、最上階の支部長室にいます。

なにこの状況…。

なんかのフラグだったの？

死亡フラグじゃないよね？よね！？

ヤバい緊張で皮膚がピリピリしてきた。

心なしかじわじわ体力を削られてる気までしてくる…。

「ああ、忘れてました」

って、なにカーテン閉めてるんですかつ。

ランプの灯りが幻想的でいい雰囲気だなおいっ！

ぬおおっさらにヤバい状況になってきてる？！

つかナパークさんにまさかのロリコン疑惑？

ある意味死亡フラグよりたち悪いフラグじゃないかああっ！

「さて…」

ひいいいっ！

ヤバいやバいっここは先手必勝に限るっ！

「話というのはですね「だが断るっ」…は？」

「ロリコンの慰みになるのも死ぬのも御免こうむる！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………はあ」

あれ…？

なんか深いため息つかれたよ。

私、なんか間違えた？

第五話「だが断るっ」(後書き)

ナパークは精神的ダメージを受けた(笑)

第六話【お説教マジ怖いっ！】（前書き）

誤解は早めにときましょう。

第六話【お説教マジ怖いつつ！】

結果、ものすごく怒られました。

ナパークさんの後ろに静かに燃える青白い炎を見た気がします。

「誤解は解いていただけましたか？まだのようでしたら最初から…」
「バッチリです！ここに来たのは私の素性を聞くためで、カーテンを閉めたのは日差しが私に当たらないようにでありますっ」

ナパークさんコワいつ！ナパークさんコワイ！お説教マジ怖いつつ。

ナパークさんは頷いてすっかり冷めたお茶を飲むと「さて本題ですが…」と切り出してくる。

「まずミコト様は生まれてから15年間なにをしていましたか？」

今日この世界に来たばかりですとはさすがに言えないよね。

「えっと、わかりません」

「どついう意味でしょうか」

「今日、目が覚めたら篝火の宿の一室に居ました。それ以前にこの世界で過ごしていた記憶はありません」

うそは言っていないよね。

「ヴァンパイア族は世界が産み出すのですから、私も今日生まれたのではないのでしょうか？」

「ふむ、確かにヴァンパイア族の誕生については謎が多いですが…、では誰が宿の手続きを？あと誰からあのような大金を？」

管理人様ですとはいえないよね…、どーしよー…。
ここはやっぱり…

「わかりません」

私の言葉にナパークさんが顎に手を当てて考え込む。
これはあとで宿に確認に来るな、絶対。

「まあ、宿については後ほど確認することにしましょう。 お金に
ついては…、いいでしょう」

やっぱりな！

でもお金はスルーなんですかつ！
むしろそこが重要じゃね？

「ミコト様は些か不足しているとはいえ、知識をもっておいでです
が誰に教わったのですか？」

管理人様からのプレゼントです…。

「せっ世界からのプレゼントではないでしょうか？」

「世界から、ですか…」

怪しんでるっ！

めっちゃ怪しんでるよっ！

どうしよう、このまま突き詰められても困るんですけど…。
どう言訳したらいいかなあ？

「ふう、まあヴァンパイア族ならあり得そうですね」

あり得るんだ。

「知り合いのヴァンパイア族も気がいたら真夜中に森の中に放り出されていた、とっていましたが」

「ヴァンパイア族に知り合いがいるんですか?!」

個体数激少なヴァンパイア族のツテゲット!

「ええ、彼やアナタは運がいいのでしょうね」

「え?」

なんでさ?

「ヴァンパイア族は生まれて直ぐ死亡する確率が激しく高いんですよ」

マジで!

聞いてないんですけど!!

「えっと、どうですか?」

死活問題なのでぜひ詳しく!!

「八割が生まれてすぐの陽光で死にます」

「……………」

あれ、今日の日中出歩いてたのってマジ自殺行為?

「ぐ、具体的には…？」

「私の実験では日中の陽光下では数値にすると3分で1割の体力消費で、日陰だと6分で1割の消費です」

「陽光下は30分で死ぬのか…」

「………ん？」

「実験、したんですか？」

「はい」

「わー、アツサリ頷いたあ…」

「恐らく実験台になった同族オツ」

「彼は真夜中に、アナタは建物内に移動されたかそこで生まれたのですぐに陽光に当たらずにすんだのでしょう」

「危なかったのね…」

「生き残ったものでも、陽光に照らされて弱まっているところをモンスターに襲われたりして死亡する者が多いです。実際、彼と出会った時は陽光とモンスターの攻撃で死にかけてました」

「そ、そうなんですか…」

「ヴァンパイア族って実は弱い？」

「少しがっかりだなあと考えつつお茶を飲む」

「…薄っ！」

「は？」

「あっえ…なんでもありません」

ヤバい、お茶のあまりの薄さについて声がでちゃった。

「そうですか、ちなみにミコト様はヴァンパイア族についてはどのくらいご存じですか？」

「世界の夜が生み出した希少種で、不老であり体力と魔力が多くて怪力で暗視を使えるって言うのと…陽光下での身体能力60%減ってことです」

言ったらまた微妙な顔をされました。

「独り立ちについては？」

「大体15〜20で独り立ちをするんですよね」

「ギルドについては？」

「冒険者、魔術師、職人、神官のギルドがあって冒険者の武器職業以外は各神殿で職業を変えられるのは知ってます」

「ギルドカードやアイテムボックスはご存じなんですよ」

「はい」

「通貨や物価…生活知識は？」

「生きていくのに困らない程度には」

「つまり？」

「簡単な料理や家事全般、食材についての知識はあります」

なんだろう？尋問されてる気分になってきた。

第六話【お説教マジ怖いっ！】（後書き）

説明文の次は質問攻め…、読みづらい文で本当に申し訳ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7095y/>

転生したけど引きこもります。

2011年11月24日22時05分発行